









作創 平原の十字星(6)  
ラウム・レーレン著 佐藤 生  
一日朝ごと用事の爲め十三キロ  
メートルス程隔つた他の植民地  
に行つた、歸る時は半途程來た  
處で日が暮れてしまつた、長い  
森林の中はひつそりしてゐた、  
五六匹の螢が先導者であるかの  
様に彼の前を飛んで行くのであ  
つた。  
精次は過日濱田から習つた一つ  
の讃美歌を歌ひ乍ら歩いてゐた  
山路越へて 一人行けど  
主の手にすがれる 身はやすけれ  
松の風 谷の流れ  
み使ひのうたも かくやあるらん  
日暮れば 石の枕にいはん  
かりの夢にも みくにいはん  
何時しき暗い 森林を出て珈琲園  
の道に歩を進ませてゐた、其處  
からは數多植民者の家の燈が點  
々として見えた、漸く戻り  
着いた時家の中の真暗であつた  
手探りで燈をつけてから彼は叫  
けんでもみた『お父さんお寝みで  
すか』  
『兄さん歸つたの』澄男が一人  
臥床から頭を上げた。  
『お父さんは何處へ行つたの』  
『何だかよく知らないけれど共金  
の催促に行つたらしく』うん  
又金の催促か そんなに人に貸  
した金位の事で迫らなくともよ  
さそうなものだがなあ』  
面相を變へて怒號する父の姿が  
精次に想像された。  
『澄男はそれで寒い事は無い?』  
『マ、イガ生きて居つてくれた  
ならこんなことは無いんだけれど  
敷蒲團が大分薄くなつたね、今  
度兄さんが造つてやるよ』  
『澄男はそれで寒い事は無い?』  
『行き度い事は行き度いけどお  
前の前のドミンゴに濱田さんがキ  
リスト様は馬小舎の中で生れた  
んだつて云うたもの』  
『澄男は一人になつて他の事  
を語り続けるのであつた。

てきつとやつて貰へる様にして、然し此れ丈げてあげるよ。ヨは學校へ行けたら、まことに嬉しいなあ。一生懸命に、ひらひら四十五度、勉強するんだよ、その時は、『あ、どんなにでもヨは勉強するよ』小さい乍がらもありなく決心の色を望む事が出来た。『もう遅いからドリミシやう』やがて澄男は小さな扉をかき始めた。可愛そうに、學校に行くためだ。伯國無心

〔笑話〕

「どうだい君、五ミル僕に貸すのに不都合な事があるのかね?」「いや絶対に何もそんな事はないね」「ちや借してくれないか?」「だがね僕も其五ミルが無いんだよ。」

事を楽しみに眠つてしまつた、父が少しでも宗教感念のある人であつたらいいがなあ……きつと近所の人々は父を嫌つて居ることだらう、考へれば父は氣の毒な人間だ。

軽て少しばかり眠つたと思う時足音が聞こえ出した『ハテ父かしら』。高高い咳拂ひに依つて確かに父である事を知つた。

『おい戸を開けんか』精次に急いで戸を開けた。

『あ、今日も無駄足を運んだ、

それから網の端を握つてゐる二人の番人は、三尋は三尋を退いて、捕虜が地點に立留つてゐるやうに強く網を張る。さうするごとに土器の破片を持つて來て彼の前に種み上げる、番人等はミセルスーの柄に身をかくして云ふ『死の前に貴様恨を晴らせ』するぞ捕虜は、時には三四千人の群に向つて、力をこめて石礫をなげ始める。

The image shows a page from the June 18, 1927, issue of the Osaka Nippon Shimbun. The layout includes a decorative border at the top and bottom. The main content consists of several vertical columns of Japanese text, each containing an advertisement. At the top left, there is a large, ornate illustration of a ship's hull and rudder. The text is arranged in a grid-like structure, with some entries spanning multiple lines. The overall appearance is that of a typical early 20th-century Japanese newspaper.

▲ 日 本 近 信 ▼

## 偉大な新兵器を發明

今後銃器の上にも

歩兵教練も大改革

價格に見積れば實に六百

萬圓に上つてゐる、これが多く

は無駄彈であるところから見て

もたゞへこのレンズ取付のため

十萬挺の歩兵銃全部で百萬圓を

要するこしても、年々費す右の

如き莫大な種丸費を少くとも半

減し得るだけでもその及ぼす影

響は非常なものだと言はれてゐ

る

## 星製薬事件進展

星製薬會社事件は警視廳より檢

事局に廻附された(紹育新報)

先般來政府當局者に於て考慮中

なりし新潟縣木崎地方に農民學

校設立の件は不許可に決定した

朴烈夫妻の

怪寫眞事件

問題を政治化

活動に移され八月二十六

日早晨から中谷刑事部長が吉益

検事正を訪ひ平田檢事共他と搜

査上の密議を重ね、一方立石刑

事部長が林次官と往來頻繁を極

めなるなど茲に漸く犯人の目星が

いよいよ司法部の

要なるものあるを説き、その目

的達成のために、萬般の方策を

調査研究させてゐるが、積極的

標準農耕法の活用を示して、や  
がて全國的に範を示す意味をも  
含められてゐる  
の如き風景と農耕知識の兩方面から興  
味あらしめようといふのだ

開けば電動力を利用して灌漑する實況

の如き風景と農耕知識の兩方面から興  
味あらしめようといふのだ

農林省の有効耕地課長、農大佐藤寛次  
教授、帝國農會の岡田幹事長を嘱託し  
本省の農村通小出督官等

も其の爲めに

近々その關係者の協議會を開

いて撮影方法を研究することに

安息期に田舎廻りへ出かけるの

に收めた秋から冬の收穫後の

現場に出張して貰ふはず

で近々その關係者の協議會を開

いて撮影方法を研究することに

御方は早速御註文相成候へば速時エンコメンダを以つ

て御地驛迄御送付申上へく候

旨を今回一般に御發表なし給

伏見宮家御節約

伏見宮家では御節約の御題旨で

御別邸御拂下の儀御考慮中の處

各位置

毎年多大なる御厚情を蒙り奉謝候今回八月一日より

御厚情を蒙り奉謝候今回八月一日より

## 伯國のお土産

(東京八日發) 摄政宮殿下は本日駐在大使に特に謁見を給つた。大使は殿下に伯國の種々あると云ふ。

## 攝政殿下へ

田付大使から

## 志願兵編入命令

第三軍管區内

軍管區司令官は管内諸隊に對し

志願兵があればドシ

編入す

## 伯國醫學會議

第九回

## 創立五十年祭

年祭を催した

## 艦隊司令長官

選任式

赤松總領事來聖

代理大使として主にリオ駐在の

赤松總領事は去る十日来聖十二

日夜行にてリオへ歸館されたる

此度の急遽歸館は古谷亞國公

使夫妻がモンテビデオ丸にて赴

任の途次リオへ立寄らるゝが爲

めの用向きたと

ミナスの鑑山學校

創立五十年祭

のたるミナス州オウロ・ブレー

トの鑑山學校は十二日創立五十

年祭を催した

伯國艦隊司令長官には今度アウ

トの艦隊司令長官にはは現任アウ

トの艦隊

## 大石内藏之助

牛井桃水

## 私の身の上話

小説の様な實話

第一回 百九十一		大石内蔵之助 牛井桃水	
別に勘平様を輕蔑するの、侮るの と申すやうな、そ、そ、そんな 料簡は御座りませぬ』と言譯を する折、森家の勘定方から、小 使が驅付けて、		『堺屋どのの、急いで御用』と知 らしたのを、好い機會に話をく ぎり、	
今、奥様切望貴姐から、宜しい やうにお取做し、何れ後程伺ひ まして、篇とお詫び申します』		『堺屋は永年の懸意親切づく と轉つ輾んづ此の場を逃れた。 『堺屋は永年の懸意親切づく で言うた事を、何もその様に角 立て、怒るには及ぶまい』	
『如何に親しい間でも、武士へ 金子を贈るとは、無禮至極な堺 屋太兵衛、以後の懲しめ、きつ と戒めねばなりません』		『此の雪降りにその姿で、出て く氣の毒に思ひゆゑ、駕籠に乗 つてお出なされど、言うてくれ たは誠の親切、その様に腹立ら れては、私夫婦が堺屋殿に、何 と話しのしやうもない是といふ のも私等が、小身者の腐甲斐な がーと伯母は涙を袖に包んだ。	
『そのお言葉を承はつては、 早く、奉公口を極めたるもの、 ドレ今から出掛けませう』		『そんななら堺屋の志、此伯母 が言葉を立て、駕籠に乗つて行 くのかへ』	
『イヤー、浪人の分際で、駕 籠に乗るのは驕りの沙汰、では 一杯飲んで暖まり、其の元氣で 乗出しませう』と自身酒屋へ行 つて酒五合と、鶏卵を三つ買調 へ、熱爛に鶏卵打込んでぐつと ひつけ、残りの金子を紙に包		『堺屋殿の急いで御用』と知 らしたのを、好い機會に話をく ぎり、	
前原伊助宗房は、淺野家の茶 坊主、前原自久の一子であつた 幼い時から家業を嫌ひ、		お手前芳志の玉子酒に寒さを 忘れ立出候残りは返し申候 『堺屋殿に書記して伯母に預け、 『堺屋の志を酒にして飲まし た、今ならば裸で居ても、寒 いとは思ひませぬ、いざ伯父上 同人參つた時、此の儘お返し下 されう、ア好い氣持になりま した、今ならば裸で居ても、寒 いとは思ひませぬ、いざ伯父上 に『お暇乞』と言つ、佐左衛門の 居室へ行き、居室へ行く、『伯父上、夫れでは行て参ります』 『ム、すりや何あつても此雪 に『これはしたり、其の様なもの 分の羽織脱かける。	
『堺屋の志、玉子酒に暖まり 更に寒氣は覚えませぬ』		『これはしたり、其の様なもの 何の着て参られませう、さもなく い時身内がはてて、この通り 汗が出来ます、必ずお氣づかひ下 されますな、さて拙者今日参 れば、多分奉公口も極ります苦 は、永々お世話に相成りました』と 極れば此の儘遠方へ参らうも知 れませぬ、伯父上にも伯母上に され、赤坂田町の照清土の女將りん は、よく、私の芝居を見に来て 居るに違ひない眞實の私の父は 母は?』	
『大分醉ったものと見えるの、 ハ、何も奉公口が極れ ばとて、直にその儘遠方へ参る に『も及ぶまい』		『重氏』『刈萱』『清玄』『地獄』『彼 岸の夕』など、僧侶を主人公と する脚本をまとめ掛けた事もある た。	
『そこが奉公、何とも申上げら れませぬ』		それにして、私の姿へ見 れば、すぐ涙顔になるおりんが 不思議でならないかつた。	
勘平は伯父伯母に、夫となく 暇乞して、いよ／＼難に赴くの である。		もう十幾年も前の事であるが 岸の夕など、僧侶を主人公と する脚本をまとめ掛けた事もある た。	
『伊助宗房は、浅野家の茶 坊主、前原自久の一子であつた 幼い時から家業を嫌ひ、		切り抜きは、明治三十三年頃の もので、大谷光瑩伯が眼を患つ て入院したといふ記事が寫真と てゐた身の上話と寫眞の経緯と を物語つてくれた。	
おりんはもと有明樓の養女で あつた、當時よく足を運んだ光		ものに記されてあつた、不審に 思つて、その由來を聞くと、お りんは涙ながらにこれまで秘め てゐた身の上話と写眞の経緯と	